

「カリキュラムの実験研究」 正 誤 表

| ページ | 行 | 誤 | 正 | ページ | 行 | 誤 | 正 |
|-----|-------|---------|------------------------|-----|-------|----------|----------|
| 9 | 3 | ③は | ①は | 122 | 3 | 全ての訓練 | 全ての訓練生 |
| 9 | 7 | 崩さないさな | 崩さない | 131 | 24 | かっぱに | かっぱつに |
| 10 | 8 | 「領域科目」 | 2.「領域科目」 | 134 | 20 | 2年生を | 2年間を |
| 15 | 脚注3 | 課程 成 | 課程編成 | " | 23 | へんてこりこな | へんてこりんな |
| " | " 4 | 実践の 過 | 実践の経過 | 137 | 10 | 指導をも | 指導員も |
| 27 | 4 | 授業分析する | 授業分析をする | 140 | 4 | 図3-7 | 図3-8-1 |
| " | 5 | 授業であって | 授業があって | 149 | 14 | 工作作業等と | 工作作業等の |
| 28 | 脚注12 | 図書の第 | 図書の第II | " | 15 | 要することのない | 要する実習でない |
| 30 | 16 | こと、表裏 | ことと表裏 | 151 | 12 | 指導員を各人 | 指導員各人 |
| 31 | 14 | 電気器科 | 電気機器科 | 155 | 19 | するが-この | するが)この |
| 49 | 17 | 未練で | 朱線で | 158 | 10 | 試験 略す | 試験と略す |
| 53 | 脚注3 | ぎまるか授業 | がまるで授業 | 159 | 14 | 延ばずに | 延びずに |
| " | " | 記してい | 記していた。 | 160 | 2 | 統一し 新 | 統一した新 |
| 54 | 14 | B-O | Be | 163 | 16 | 除中不明な | 途中不明な |
| 57 | 表2-15 | 耗器域 | 機器域 | " | 21 | の実験が | の実験が |
| 69 | 左6 | 444T f | 444T $\bar{\bar{O}}$ f | 164 | 4 | えていない | れていない |
| " | " 7 | r n s 値 | r m s 値 | 167 | 4 | 疾状を | 症状を |
| " | " 9 | :磁束 | \emptyset :磁束 | 171 | 9 | のような | このような |
| " | "10 | 周波数 | 周波数(H_z) | 172 | 4 | 学校生徒で | 学校生活で |
| 76 | 8 | 点滅により | 点滅により | 226 | 表補-10 | 前後の扱 | 前後の換 |
| 82 | 15 | 巻線-巻線- | 巻線- | 235 | 4 | 人んや23 | んに+23 |
| " | 16 | -線線- | -絶線- | 240 | 7 | 方式の応用 | 方式を応用 |
| 86 | f行 | 72 | ⁽¹⁾ 72 | 246 | 18 | 第4分節でに | 第4分節では |
| 98 | 脚注3 | 低抗を | 抵抗を | 248 | 7 | 第7分節を | 第7分節を |
| 103 | 19 | 平均的値は | 平均値は | 255 | 最下行 | 上の吟味 | の吟味が |
| 104 | 8 | (総高訓生 | 総高訓生 | 259 | 18 | 問題は残し | 問題を残し |
| 106 | 最下行 | 数 する | 数行する | 260 | 2 | 選ぶのが | 選ぶのか |
| 117 | 図 | 図3-6 | 図3-7 | 269 | 1 | 経過報告 | 研究経過 |
| 119 | 21 | あることこから | あることから | 274 | 18 | 表3-9 | 表-9 |
| 120 | (注) | 下値の | T値の | 275 | 表3-9 | 表3-9 | 表-9 |

公共職業訓練校電気科

カリキュラムの実験研究

——カリキュラム改善のための一試論——

研究担当者 職業訓練大学校 田中 萬年

研究協力者 長崎総合高等職業訓練校
山口 務
毛利 敏和
西見 安則
竹下 博之

序 文

この頃、高等学校教育、殊に職業高等学校教育の荒廃を訴える報告が少なくない。その荒廃を救済する処方箋の中には“そんな生徒は職業訓練校へでもやつて了へばいいのだ。”と云うつぶやきを耳にする。筆者はそのような言葉の中にこそ職業高校、ひいては日本の教育荒廃の源泉を垣間見るのである。

と言うのはこの言葉に、職業訓練校における職業的技能獲得の努力を通じて、初めて己の能力の開花と自信を獲得してゆく青少年への認識と愛情の欠落を感じるからである。

昭和52年現在、高校進学率は93%に達しているが、しかしなお年間3万の養成訓練入校生の80%は中卒者であり、そのうち93%以上は新規中卒者である。そして、これら訓練生はこの言葉に示されるような無責任と無理解に耐えながら勉学に励んでいるのである。また7000人の指導員が日夜彼らの教育訓練に腐心している現実は無視されてはならないと思う。

本報告は訓大調査研究部の田中萬年研究員の多年のカリキュラム研究の成果である。実習を中核とする職業訓練のカリキュラムは単に学校教育のカリキュラム編成技術をそのまま適用できないが、本報告はこの課題に跳んだ最初の普遍的研究の成果と言へよう。これが公共職業訓練校の指導員諸氏への心からの支援の一つとして受取つて戴けることを祈りたい。また一般の職業教育御関

係者からも卒直な御批判を賜はることができれば、著者と共に
何よりの喜びと思う。

昭和52年3月

調査研究部長

宗 像 元 介

調査研究報告書第40号

発 行 昭和52年3月28日

発 行 者 職業訓練大学校

調査研究部長 宗 像 元 介

職業訓練 神奈川県相模原市相原1960

大学校 TEL (0427)61-2111

印刷 港栄印刷